は，『対象生徒の実態把握と理解』，『他生徒指導の参考』，『共通理解と連携』のいずれの項目でも，たいへん有効であることが明らかとなった。

『対象生徒の実態把握と理解』では，回を重ねるごとに，「たいへん深まった」の人数が増加し，事例研究会形式の研修成果と考えられる。

『他生徒指導の参考』と『共通理解と連携』でも，「たいへん」と「まあまあ」を合わせた人数が多く，研修成果は大きいと考えられる。

以上を踏まえ，この評価結果と前掲の実施の反省から，第2回〜第4回の事例研究会は，次のようにまとめることができる。

○　第2回は，『試みる』段階

○　第3回は，『指導の手がかりをつかむ』段階

○　第4回は，『校内の指導分担と指導の見通しを持つ』段階

研究協力校では，以上の段階を追って，校内組織として，事例に対応する態勢が出来上がり，合わせて教員一人ひとりの力量も高まったといえる。

このように，教員一人ひとりの力量は，単独で存在するのではなく，校内組織との関係において，高められ，発揮されていくものである。

その意味で，研究協力校は，総勢10名でまとまりがよく，全職員の生徒指導・教育相談への研修意欲が高く，かつ計画的に研修会を実施できたことが重要であり，この成果となってあらわれたと考えられる。

3．生徒への指導援助に関するチェックリスト（試案）の開発と試行

(1)　チェックリスト（試案）の開発

チェックリストの概要は【図16】の通りである。[4) 5) 6)]

(2)　試行の結果

（次ページ［表2］）

チェックリストは，治療的・予防的・開発的の3つの各12項目について，指導援助の程度を「はい」，「どちらともいえない」，「いいえ」の3段階で質問した。

［表2］の人数（%）は，「どちらともいえない」，「いいえ」の合計の値である。

また，治療的援助と予防的援助の各項目は，共通しており，先行研究を踏襲している。

「どちらともいえない」，「いいえ」の

生徒への指導援助に関するチェックリスト（試案）

このチェックリストは，日ごろの教育活動を自らチェックし，今後の指導援助に役立たせていただくために，作成されたものです。

－　中　略　－

<予防的な指導援助>

現在は表面化していないが，将来何らかの問題を起こす可能性のある生徒に対し，予め問題行動の未然防止に向けて指導援助すること。

No.	チェック項目	チェック内容	はい	どちらともいえない	いいえ
1	指導援助者としての姿勢	日ごろから生徒との触れ合いを大切にし，生徒の問題への気づきと相談的な姿勢を心がけている。			

［以下のチェック項目・内容］

（チェック項目）	（チェック内容）
2．生徒理解	日ごろから生徒理解や問題行動の理解に心がけている。
3．早期発見	日ごろの生徒との触れ合いの中で，生徒の僅かな変化に気を配り，問題への気づきを心がけている。
4．ラポールの形成	日ごろから生徒とのラポール形成に心がけている。
5．問題の把握	問題行動の予防のために，予め資料を収集して診断し，指導援助するように心がけている。
6．指導態勢	日ごろから校内の関係者と生徒の情報交換を行い，予防的な指導援助の態勢作りを心がけている。
7．専門機関連携	日ごろから専門機関への理解を深め，いつでも助言や連携が得られるように心がけている。
8．本人援助	予想される問題行動の背景に目を向けながら，問題への気づきを図り，自己洞察を深めさせ，問題行動を未然に防止するように心がけている。
9．家庭援助	問題行動につながると予想される家庭の背景への気づきを図り，問題行動を未然に防止するように心がけている。
10．学級援助	学級の望ましい人間関係づくり，規範意識の向上を図りながら，生徒一人ひとりが生き生きと生活できる学級づくりを心がけている。
11．振り返り	予想される問題行動への指導援助に対し，常に振り返りを行い，適切で効果的な指導援助を心がけている。
12．援助終了	日ごろから問題行動につながると予想される原因や背景に目を向け，本人の様子を見守るように心がけている。

－　中　略　－

<開発的な指導援助>

すべての生徒に対し，生徒自身が自己理解を図り，自ら自己実現に向けて進んでいくことができるように指導援助すること。

－　以　下　略　－

【図16】　生徒への指導援助に関するチェックリスト